

館報

No.31

1985.1.

図書館 雑感
西域の文化遺産
附属図書館本館
利用細則を制定
附属図書館本館
の増改築進む

図書館 雑感

名 取 靖 郎

現代は情報革命の時代である。大型コンピュータからパソコンに至るまで、情報化の波は日常生活のあらゆる局面に否応なしに押し寄せてくる。現代社会に供給される情報量は時間に対して指数関数的に増大しつつあるが、情報の流れの中で中心的な役割をはたすべき図書館、特に大学図書館の未来像はどのようなものであろうか。

増大する図書あるいは逐次刊行物の量に応じて書庫を増築し蔵書数を拡大していくことは予算の上から限界があり、利用者にとっても必ずしも歓迎するところではない。近年における情報量の増大は、ひとつの専門分野に限っても、個々の研究者が毎月発行される専門雑誌の全論文に眼を通すことを不可能にしている。原著論文掲載誌、抄録誌、総説誌などをバランス良く提供するとともに、コンピュータによる情報検索システムの有機的活用が図書館の中心的役割となる所以である。

現代は専門化の時代であると同時に一般化の時代でもある。学問・技術の発展は必然的

に専門分野の細分化をもたらすとともに、新しい学問の創造には他の分野とのいわゆる学際的交流が必須となる。図書館においても専門化と一般化という相異なる要求に応えねばならないが、この矛盾した命題をどのように解決するのだろうか。

大学の中央図書館が、全分野にわたる資料を取り揃え、大学構成員の多様な要求に応えるのは、ひとつの理想かも知れないが、現実には困難である。予算上の制約が仮にないとしても、一般化は拡大を意味し、専門化は集約を意味するからである。米国の大規模総合大学では、目標を異にする多数の図書館を構内に配置している。例えばカリフォルニア大学バークレー校の場合、一般資料を所蔵する中央図書館の他に、専門学科ごとの完備した専門図書館、東洋図書館のような特殊図書館、さらには学部学生の勉学の間を提供する学部学生図書館など、それぞれのレベルや分野に応じた多数の図書館が有機的に連携しながら機能している。他方、マサチューセッツ工科

大学(MIT)のような理工系専門大学では、学科ごとの図書室は殆んど置かれず、主要な資料は科学図書館にすべてまとめて揃えられている。MIT図書館で感心することは、理料系大学でありながら科学図書館の他に総合大学顔負けの人文図書館が独立して設置され、人文および社会科学の資料も完備していることである。さらにMITでは音楽専攻の学生など居ないにもかかわらず、図書館の一角には音楽図書館が設けられ、多数のシンホニーの総譜を含めた広汎な楽譜が備えられている。膨大なレコードやテープのコレクションから随時借出して聴くことのできるイヤホンの施設も完備しているのは羨しい限りである。

ヨーロッパ、特にドイツの大学では各研究所ごとの図書室と中央図書館が配置されていることは米国の総合大学と同様であるが、中央図書館の居心地が良く、学生はコーヒーなどを飲みながらゆったりと勉強している。さらにドイツでは、図書館などの公共建造物の建築費の何パーセントかは彫刻や絵画など、美術品を購入して装飾にあてることが定められているようで、文化的余裕が感じられる。

徳島大学のような中規模大学、それもキャンパスが常三島と蔵本に二分されている大学では、両地区を綜合する中央図書館の設置は現実的でない。それぞれの地区の特殊性に適合した図書館の発展を目指すべきであろう。特に蔵本地区は、医歯薬の三学部からなる全国でも数少ないメディカルセンターであるだ

けに、ライフサイエンス総合図書館としてユニークなモデルを提供しなければなるまい。コンピュータによる情報検索システムの拡充を中心とした近代化を推進すべきことは当然であるが、他方、ライフサイエンスに関連する歴史、哲学、社会学分野の文献の収集も等閑にできない。そして何よりも大切なことは、図書館を居心地良くすることである。具体的な文献検索を目的とせずとも、研究に疲れた心を休める「息抜き」の場として座り心地の良いソファがあり、そこで絵を眺めるもよし、居眠りをするのも良かろう。夢見心地の中に素晴らしい研究のアイディアも浮んでこようというものである。

それから徳島大学のような国立大学図書館にあっては、将来、一般市民の生涯教育の一環として大学構成員以外への開放も考慮すべきではなかろうか。州立大学であるカリフォルニア大学図書館は、一般市民が年間25ドル程度の料金で借出権を含む図書館利用証を入手できる。図書館が図書を蔵いこんで、限られた人達に勿体ぶって利用させるという時代は過ぎ去ろうとしている。大学における知識の創造および蓄積は、それが公開され一般社会からのフィードバックを受けることによって、次の創造への原動力となる。「開かれた図書館」こそが大学図書館を活性化し、大学の中核としての地位を確保する道である、というのは愚者の楽園夢であろうか。

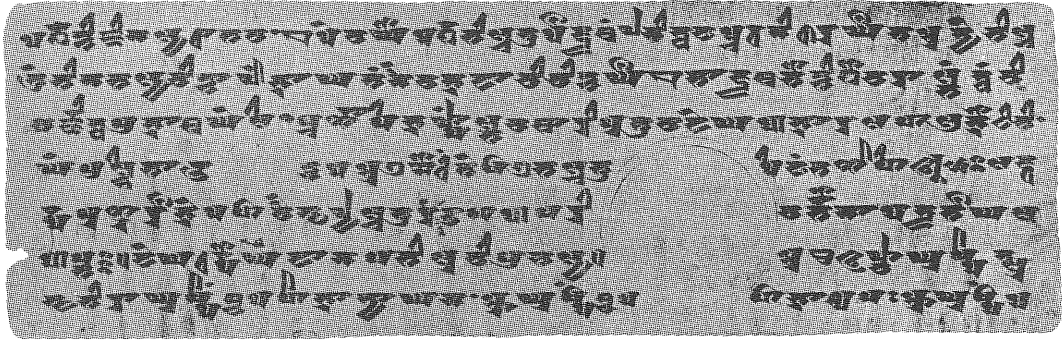
(医学部教授)



西域の文化遺産

— 幻のレニングラード写本 —

戸田宏文



Saddharmapundarika. Ms. Petrovskij. End of Chapter III.

(上掲の写真は、ペトロフスキー写本のうち、従来公表されていたものである。)

古典を学ぶ者にとって、その繙く原典の校訂の出来、不出来が一つの大きな関心事である。その校訂が良ければ、非常に楽に読むことができ、若しそれが悪ければ大変難渋することがしばしばである。

さて、東洋で、大乘經典、法華經は、宗教、思想、芸術に多大の影響を与えてきた佛典の白眉であることは、よく知られているところである。この佛典の梵語原典は、オランダのケルン博士と我国の南条文雄博士に依って、1908年より1912年にかけて、露都ペテルスブルグに於て始めて出版された。この刊本は、久しく editio princeps として世界の学界を裨益し、今日に於ても法華經原典研究に際し、基本書として用いられている。

ところで、この刊本は、南条博士に依って

作製された原稿に、ケルン博士が加筆して成ったものである。これについて南条博士はこう記している。

「この刊行について、非常な斡旋の労をとられたのは、文学博士高楠順次郎君である。高楠君はこれよりさき明治38年、イギリス・ロンドンに留学中、ケルン氏に書状を送って、私の校訂した『法華經』を出版せんとする意向を伝えられたが、これに対してケルン氏は『梵文法華經』の出版については、先にこの經の英訳されたときに用いられた原本、並びにその後ニポール(カシュガールか、筆者註)において発見された同經の残片もあるから、これらを委しく参照して、私との共同事業として刊行したいとの返事を認め、さらにロシア首都にある帝国大学の委員にも相談を重ね

られ、同時に私の方からは梵本全体を清書してケルン氏に送付し、幾多の苦心をへて、その全部が完結したのである。」(懐旧録「東洋文庫」No.359)

この刊本は、ネパールに伝わる紙の上に書かれた写本(ロンドン・王立アジア協会所蔵)を底本とし、ケンブリッジ大学図書館所蔵の貝葉(シュロの葉)の上に書かれた写本2種、大英博物館(現在は大英図書館)所蔵になる貝葉本、現在東京大学所蔵の河口慧海氏将来の紙本等の諸本を校合して、梵語原典の原稿を作製したのであった。ところが、彼の写本の読み方は、不正確であり、脚註に記すヴァリアントの記載にもしばしば厳密さを欠き、重要な読みを見逃していた。さらにこの事態を悪くしたのは、ケルン博士の加筆であった。彼は明らかに系統を異にする、中央アジア・コータン附近で発見されたカシュガール写本と名付けられているもの(ペトロフスキー写本とも言う、後述。)の読み方をより原初的で好ましいと過信して、それを採用し、南条博士の原稿を加筆訂正した。その結果、現実には存在しない架空とも言える主観的な原典を恣意的に作り上げてしまった。しかも、彼のカシュガール写本の読み方は、残念ながらしばしば不正確であった。このように、この刊本は、法華経原典の学問的研究の資料としては不完全なものであると言い得よう。

そこで、筆者は、これを解決するには研究の出発点に立ち返り、まず写本の解読研究が最も先決かつ肝要なることであると考えるに至った。

法華経の梵文写本は現在3種類の伝本が知られている。すなわち、(1)ネパール本、(2)中央アジア本、(3)ギルギット本である。ネパール本は大別して貝葉本と紙本に分けられる。

一般的に言って、ネパール本とギルギット本とは、非常に類似性が高く、中央アジア本とはその部類を異にしている。

ところで、これらの写本の総数は、現在知られているものだけでも、40種以上にのぼりどれをまず中心に研究すべきか研究者を当惑させる。幸いなことに、筆者は、昭和40年9月清田寂雲教授のご好意により、世界の学者の垂涎の的となりながら、数十年間門外不出であった、レニングラード東方研究所に所蔵されているペトロフスキー・コレクションのカシュガール写本を披閲、研究する機会に恵まれた。まことに、清田教授との出遇いが、筆者の一生の研究を方向づける一大転機となった。

清田教授がこの写本のマイクロフィルムを入手した経緯について、昭和30年10月27日付の「アカハタ」に「ソ同盟から法華経原典—マイクロフィルムに収めて—よろこびの学僧片山潜同志の甥・清田氏」と題して次の如く報じている。

「明治30年ごろ帝政ロシアの役人だったペトロフスキー氏が中央アジアで手に入れた写本は、紀元7世紀ごろのもので、その後ソヴェトに保存されていることがわかり、インド哲学や、仏教はじめ、学界各方面の研究にとって、非常な注目を集めていた。岡山県久米郡柵原町、本山寺住職、清田寂雲氏(36)は片山潜の甥にあたる人だが、インド学・仏教学を研究しており、今春、日ソ親善協会にこの写本を入手したいという希望をつたえた。同協会副会長堀江邑一氏は、たまたま学術使節団として訪ソした京大桑原武夫教授に託して、ソ同盟科学アカデミー会長ネスメヤーノフ氏にこの件を依頼する手紙を送った。この日ソ親善協会に科学アカデミー—東邦学研究所

ア・エム・シャムストディノフ理事から『このめずらしい書物が、清田さんの御用にたつよう願っております』という手紙とともにマイクロフィルムが送られてきた。

爾来、この写本の筆者の解説研究は、今日に至るまで10数余年に及び、漸く一つの成果となり、上梓することができた。

このカシュガール写本と名付けられているものは、厳密な意味では、これが西域南道の大都市、コートン（于闐）で発見されたので、コートン写本と名付けられるべきであるが、インドのローケーシュ・チャンドラ博士の影印出版（ニューデリー、1976年）に用いられている名称が、カシュガール写本であるので、これが一般に用いられている。

この写本は、499枚の紙の上に書かれたものと考えられ、現在知り得る限りでは、12枚散逸し、447枚が現存する。そのうち396枚が、ペトロフスキー・コレクションに在る。（このうち、2枚は、シュタイン・コレクションにある2枚の片割れである。）この写真は、1955年11月～12月にインドを訪問したソ連邦のブルガーニン首相、フルシチョフ第一書記の両氏が、ネール首相へ、偉大なる独創的文化の創造者としてのインド国民に讃意を表して贈られたものである。ネール首相より前述したローケーシュ・チャンドラ氏の父ラグ・ヴィーラ教授に渡り、彼が出版することになったのである。（ただし、文化遺産を公表する場合の慣例である先方の公表許可を、ローケーシュ・チャンドラ氏が得たか否かについては、同氏は口を閉して答えないと聞いている。）

その外、40枚はシュタイン・コレクション（大英図書館）、9枚はトリンクラー・コレクション（西ベルリン、国立図書館）、4枚はヘルンレ・コレクション（旧インド省図書館）、

1断片は、ハンチントン・コレクション（イェール大学図書館）、6断片は、旧大谷コレクション（北京、民族文化宮図書館）と、コートンで発見された文書が中央アジアを探検した諸学者の将来するところとなり、世界の各地に散在することとなった。

この写本の書写年代は、ケルン博士が最古のネパール貝葉本（1039 A・D・書写）よりも数世紀遡るとなしたことにより、一般には6・7世紀と見做されてきた。そして中央アジア出土であるという理由で、羅什訳法華経（406 A・D・訳出。我国で広く読まれてきたもの。）との類似性が我国では信じられてきた。しかし、コートン語の権威者、ハンブルグ大学のエンメリック教授との研究の結果、コートン語の奥書きの言語様相から見て、この写本は9・10世紀、むしろ10世紀頃の書写という結論を得た。そうすれば、この写本の書写年代は、最古のネパール写本のそれと余り隔らないと言うことが明らかである。

このカシュガール写本と本文を同じくする写本の断片が、シュタイン・コレクション及び、西独の図書館（ベルリン、ミュンヘン）に多数あり、しかもそれがコートンを中心とした地域で発見されたものであることからして、カシュガール本は、コートン附近で人々の間に広く流布していた代表的な伝本と言うことができる。そして、コートンがウィグル族のカラハーン朝に征服され、滅亡する10世紀末まで、盛んに人々の間に膾炙していたものであろう。これは、法華経のコートン語による綱要書があり、コートン語の仏教詩集・ザンバスタにも引用され、更には、チベット語コートン史にもその名が見えることからしても首肯されるであろう。

（教養部教授）

附属図書館本館利用細則を制定

このたび、附属図書館利用規則に基づく附属図書館本館利用細則が定められ、昭和59年10月1日から施行されています。

この利用細則は、昭和59年4月から実施している業務電算化（図書館資料の貸出し、返却業務）にともない、貸出し・返却の手続方法が定められ、貸出可能冊数、貸出期間等が変更されたことと、現在まで利用細則を制定せずに、利用案内等により周知し、運用していた利用に関する必要な事項を明文化し制定したことです。

この利用細則の施行にともない、利用者特に留意していただきたい事項は次のとおりです。

(1) 貸出期間を超過したときは、資料の返納のあった日から超過した日数に相当する日数の貸出しが停止されます。

(2) 整理業務（書架の図書排列のみだれを直す作業）のため毎月第2及び第4の金曜日の午前中が休館となります。ただし、前・後期の学期末試験中は休館しません。

なお、利用細則の全文は、徳島大学規則集及び徳島大学々報第287号に掲載されていますし、本館2階の運用カウンターにも印刷して置いてありますので御利用ください。不明な点は本館運用係（内線6143）にお問い合わせください。

附属図書館本館の増改築進む

当館の現有建物の西側に隣接する鉄筋コンクリート造3階建て建物の増築工事が昨年8月25日から始まりました。

増築部分の概要を紹介します。

- (1) 建面積 560㎡、延面積 1,620㎡
- (2) 完成予定 昭和60年3月25日
- (3) 建物の内容
 - 1階 集密書庫 483㎡ 21万冊収容
(将来26.5万冊収容)
 - 2階 開架閲覧室 443㎡ 1.7万冊収容 144席
 - 3階 視聴覚室（準備室を含む）

178㎡ 特殊資料室27㎡

研究雑誌閲覧室 266㎡ 1.9万冊収容 16席

なお、増築に伴い現有建物の目録室(2階)、教官・院生閲覧室(3階)、新聞閲覧室(1階)等の改修が行われ、学生自習室(3階)、ブランチングルーム(軽読書室、2階)が充実されます。完成後は図書館資料等の充実を行うとともに、教室・研究室等からの移管図書(返納図書)も整備して、図書館資料の集中化につとめ、魅力ある図書館づくりを目指しています。

琉球 学術研究報告（1872～1876年）
 ○アメリカ公民権斗争の歴史資料

昭和58年度

北海道 ○ロシア亡命文学コレクション

北海道教育 ○英国教育史コレクション（1850～1965年）

小樽商科 ○モニトウール・ユニヴェルセル紙

岩手 ○府県統計書集成

東北 ○米議会・委員会刊行「諸種報告書・文書総集成」（1903～1934年）

図書館情報 ○英国図書館研究開発部レポート集成（1965～1983年）

筑波 ○国家社会主義法（1933～1945年）

東京 ○カナダ判例・法令集

東京学芸 ○ヘボンその他外国人編さんによる日本語・東洋語辞書集成（幕末～明治期）

東京外国語 ○朝鮮日報（1921年9月～1979年12月）
 ○音楽学学位論文集（1973年～）

東京商船 ○ロイド海事判例集

新潟 ○上杉文庫

横浜国立 ○ミラボー伯著作・資料集

上越教育 ○音楽教育学位論文集（1971～1980年）

名古屋 ○チベット仏教全書

京都 ○19世紀英国下院議会文書

京都工芸繊維 ○ヤン・トーロップのグラフィック・デザイン

大阪 ○赤木文庫蔵「古浄瑠璃」コレクション（1633～1719）

大阪外国語 ○インドネシア現代史政治資料集成（1940～1970年）

兵庫教育 ○アメリカ教育関係コレクション（1960～70年代）

広島 ○教育科学学位論文に関するコレクション（1945～1980年）

香川 ○フランスの哲学評論

九州 ○ファイナンシャル・タイムズ誌

熊本 ○民国20年代中国大陸土地問題資料

大分 ○大正新脩大藏経

琉球 ○米国教育行政研究資料



会 議

附属図書館運営委員会

(昭和59年度)

議 題

- 第3回 昭和59年7月2日(月)
(於：本館)

1. 昭和59年度教養図書購入費の配分(案)について
2. 徳島大学附属図書館本館利用細則(案)について

議 題

1. 昭和59年度学生用図書購入費配分(案)について
2. 昭和59年度参考図書購入費配分(案)について
3. その他

- 臨時 昭和59年9月17日(月)
(於：本館)

議 題

- 第4回 昭和59年7月30日(月)
(於：蔵本分館)

1. 徳島大学附属図書館事務分掌細則の一部改正(案)について

人 事 異 動

昇 任 助 岡 君 二 図書館専門員 受入係長併任 (前受入係長) 59. 10. 1



本学教官著作寄贈図書

(昭和59年6月～11月受入分)



著者名	書名	寄贈者	配置箇所
高橋義造	電子計算機演習	高橋義造	(本館)
〃	電子計算機II	〃	(〃)
徳島大学工業短期 大学部30年史編集 委員会	徳島大学工業短期 大学部30年史	徳島大学工業短期 大学部30年史編集 委員会	(〃)
高杉益充	薬剤識別コード事典 昭和59年改訂版	高杉益充	(蔵本分館)
〃	新薬情報学	〃	(〃)

目 次

図書館雑感…………… 1 西域の文化遺産…………… 3 附属図書館本館 利用細則を制定…………… 6	附属図書館本館の増改築進む…………… 6 全国共同利用大型コレクション案内…………… 7 会議・人事異動…………… 9 本学教官寄贈図書…………… 9
---	--

開館時間

授 業 期		休 業 期	
月 ~ 金	土	月 ~ 金	土
9時～20時	9時～16時30分	9時～17時	9時～12時30分



● 出版物をご寄贈下さい ●

最近、学内の学会等で出版している雑誌の論文複写依頼がふえておりますが、図書館に備付けてないものが多く、要求に応じられない場合があります。できましたら出版の際、図書館にご寄贈願ひ、広く利用させていただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

編集：発行 徳島大学附属図書館
 (〒 770) 徳島市南常三島町2丁目1番地 徳島 (0886) 23-2310 内線(6111)